

CROSSUP 特色を生かした大学の挑戦

立地・ブランドイメージに頼らない 大学それぞれの生き残り策

大都市近隣ではない土地にキャンパスを構える大学は特に、志願者の確保が厳しくなっている。そんな中、独自の戦略や存在意義を発揮することで生き残りを目指す大学が増えている。今回は、石川県の金沢工業大学と秋田県の国際教養大学の事例を紹介する。

研究から教育にシフト 独自の存在意義を見出す

18歳人口の減少や少子化の加速が叫ばれる今日において、都市部以上に厳しい状況にあるのが地方都市である。受験者層が減少し続けている上に、都市部の有名大学を目指す学生も多い。中には、定員割れや募集停止、廃校の危機に追い込まれる大学も出始めている。

逆風が吹く中で、独自の存在意義や教育方針を打ち出し、それを的確に受験生や保護者、高校の教員などに伝えて受験者・入学者を確保している大学もある。代表的な例が、石川県石川郡野々市町にある金沢工業

大学（K I T）だ。現在、K I Tで学ぶ学生のうち、約7割は県外出身者だ。

K I Tの特徴は、徹底した教育支援体制とカリキュラムの充実である。企画部 広報課長 志鷹英男氏は、1995年からスタートした教育改革が、現在の基礎である。

「当大学がこの改革を打ち出した当時は、ほとんどの大学が教員の研究を中心に方針や戦略を考えていました。しかし、K I Tがいかんにか生き残るべきかを考え、学生の教育に注力する大学を目指したのです。」

この考えに至るきっかけに、91-92年ごろに実施した欧米への視察がある。欧米の大学が学生への教育や

人材育成に力を入れる現状を見て、その重要性を再認識した。

「その後、検討委員会が発足し、K I Tが提供する教育のあり方について議論を重ね、カリキュラムや授業のシステムなどに落とし込んでいきました」（志鷹氏）。

能動的に動く学生の 育成支援が大きな特長

K I Tでは、教育目標として「自ら考え行動する技術者の育成」を掲げ、授業やプログラムなどをこの目標を実現するために組み立てた。特徴的なものに「自己成長型教育プログラム」がある。学生たちはまず、必修授業で将来のビジョンを自ら作

成し、それを実現するための計画を立案。計画に基づいて、1週間単位で授業はもちろん、課外活動も含めた行動履歴と自己評価を記録し、担当教員に提出する。教員は、学生の記入を見て、コメントを返す。このやりとりを年間通じて継続する。加えて、各学期末には設定した目標に対して学習達成度がどれほどかを確認する。このプログラムを通じて、学生に能動的に学ぶ力や、課題を解決する能力を身につけさせることが大きな狙いであるという。

学生の自主的な活動を促進するために、インフラも整備した。それがキャンパス内にある「夢考房」という施設。これは工作機械や電子回路

大学の認知度アップ目指し 学長が率先して情報発信

秋田にも、ユニークな教育プログラムと積極的な情報発信で注目を集める大学がある。公立大学法人として04年に創設された国際教養大学（A I U）だ。授業はすべて英語で行われ、専任教員のうち半数以上が外国人。また、卒業までに必ず1年間の海外留学が義務づけられるなど、徹底して国際的な人材育成を目指している。事務局長の小山内優氏は、次のように話す。

「こういうユニークなカリキュラムを持った大学であることを、高校の進路指導担当の先生方がよく理解してくださっています。だからこそ、真剣に英語や国際的なコミュニケーション能力を身につけたい受験生が集まってくれていると感じますね」。独自の教育プログラムを広く情報発信することで、大学名の認知度も向上できているという。

また、A I Uの認知度や人気が高まった理由として、学長自らの積極的なPRも、大きな要因のひとつに挙げられるという。A I Uの学長は、前東京外国語大学 学長の中嶋嶺雄



国際教養大学の学長
学長自らが率先して広報
自大学の魅力を対外的にPR

講演やマスコミへの露出もいとわず、積極的な中嶋嶺雄学長。講演などでは必ず、国際教養大学の特色や魅力をPRするという。また、説明会や父母会などにも積極的に登場、自らPRパーソンとして活躍している

のプリント基盤制作装置などを常備した作業スペースで、K I Tの学生ならば工具の安全な使い方を学ぶ講習を受ければ誰でも自由に使える。課外活動の支援が大きな目的で、この施設を拠点に立ち上がったプロジェクトチームが「NHK大学ロボコン2007」で優勝した実績がある。

こうした取り組みが注目され始めたのは03年ごろから。志鷹氏は、その理由を次のように話す。「まず国立公立大学の法人化を翌年に控え、大学のあり方が注目され始めたということ、卒業生が社会に出始め、活躍し出した時期が重なったのだと思います」。メディアへの露出も増えた。

「メディアの方に、実際にキャンパスへ来ていただいた影響も大きかったようです。大学生は勉強をしない、という先入観があるようで、『図書館に学生がいますね』と驚かれることも多かったです」（志鷹氏）。

その結果、制度だけが一人歩きしているのではなく、学生が実際に成長できる大学、として各種メディアに取り上げられた。

氏。A I Uの創立に際して、中嶋氏は早くから独自の構想を持ち、それを対外的にも発信していった。

元外語大学長で文部科学省の中央教育審議会委員を務めた中嶋氏が、今までにないカリキュラムの大学を作る。こうした話題性もあって、新聞各紙にある人物紹介コーナーに登場する機会も多かった。

学長の情報発信は、創立当初だけに留まらない。また、広報活動の対象も、マスコミだけではなく多岐にわたる。

「学長への講演依頼は全国から、年間数十回ほど届きますが、できる限り引き受け、大きなテーマについて講演すると同時に、できるだけ大学の特色などを話しています。また、高校の進路指導担当教員を対象とした説明会などにも参加し、大学の魅力を伝えていきます」（小山内氏）。

現在、県外からの受験者が約8割近くを占めている。「県内にも優秀な学生はいるのですが、ライバルが全国から集まるために尻込みする学生も多い」（小山内氏）。来年3月、A I Uは初の卒業生を社会に送り出す。真価が問われるのは、これからと言えるかもしれない。